慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	新倉, 俊一(Niikura, Toshikazu)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2013
Jtitle	Booklet Vol.21, (2013.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000021-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

村野四郎は「西脇さんが泰西の新しい詩的思考の匂をぷんぷんさせて、日本におりたった時に、わが国の文芸復興ははじまった」と評している。日本近代の文芸復興期に西脇順三郎が果たした役割は非常に大きい。単に詩人として評価するだけでは十分ではないと言えよう。その比類のない知性と感性によって、彼は新しい思考のスタイルと感性の変革をもたらした。それは恰も、『新論法』（Novum Organum）を著して、イギリスのルネッサンス期に新しい学問の土台を作った、あのベイコンの仕事になぞらえられるのではないか。

そこでこの企画は、詩人、詩論家、あるいは言語学者、思想家、原始文化研究者など、さまざまな角度で分光して、光源体としての西脇を映し出そうと試みたものである。ご協力をいただいた各分野の方々に、心からお礼を申し上げたい。

冒頭の「萩原朔太郎と西脇順三郎――二つの〈詩の原理〉」は、まず導入部として、詩人・詩論家として活躍した二人の対決とその後の展開を中心に、時代の流れを明らかにしようとした。二人の新旧「詩の原理」の歴史的意義を再検討する契機となればと念じている。

つぎに、安藤礼二の「ディオニュソスとスサノヲ――西脇順三郎と折口信夫」は、「古代」への深い関心をめぐり、研究者であり同時に表現者であった両者の類縁性に言及している。近年、折口信夫研究に新しい波紋を投じている安藤礼二の評論は、今後の西脇研究に新しい局面をもたらすにちがいない。

笠井裕之の評論「純金の鍵の行方――西脇順三郎と瀧口修造」は、とかく「超現実主義」という流派の名前で一括されてしまう西脇と瀧口の位相を、もっと現実に即した醒めた眼で見直そうという試みである。

瀧口と同じく西脇の弟子であった言語学者で哲学者の井筒俊彦について、井筒の研究者で論集の編者の若松英輔は、「黎明（しののめ）の詩学――西脇順三郎と井筒俊彦」で二人の「詩」と「哲学」の間に生起した精神のドラマを大胆に究明している。これまで触れられることのなかった領域である。

つぎの工藤進の「西脇順三郎の《漢語ギリシャ語比較》とはなにか」は、言語学者による最初の本格的な検討である。晩年の西脇が音韻の比較に没頭していたことは、ごく一部の人にしか知られていない。ただの好事家の関心として黙殺されてきたが、工藤進はこれを本質的に詩的行為とみなして、新しい意義付けを試みている。

最後の三篇は、現在活躍中の三人の詩人たちによる西脇詩の新鮮な解読の試みである。朝吹亮二の「西脇順三郎のシュルレアリスム」は、西脇がシュルレアリスムに対してどのようなスタンスをとったか、ブルトンと比較して論じている。つぎの杉本徹の「フローラの詩学」は西脇詩の牧歌的性格に着目して、そこにいかに永遠との感応がみられるかを辿っている。そして、八木幹夫の「詩集『えてるにたす』について――永遠のアイロニー」では、「永遠」という形而上的な命題をいかに西脇がアイロニカルな言語表現によって取り扱っているかを検証していく。いずれも、アート・センターで開催している西脇研究会のメンバーで、これらの試論が今後の西脇詩解読のパンドラの函を開けることを期待したい。

海外の作家による西脇評価については、エズラ・パウンド、ジョン・コリア、それにクリストファー・ミドルトンの三人の手紙から興味深い箇所を西原克政に抄訳して頂いた。

慶應義塾大学アート・センター訪問所員／特別編集長　新倉俊一